

墨子耕柱篇補正

耕柱篇

耕柱篇 子墨子曰、我將上大行。駕驥與羊、我將誰駁。

○「誰」：誰、孰也（古書虛字集釋卷九）。

耕柱篇 耕柱子曰、將駁驥也。

○「將」：將、猶當也（古書虛字集釋卷八）。

耕柱篇 耕柱子曰、驥足以責。
○（以驥足責）

○「驥足以責」は王念孫の校に従ひ、「以驥足責」に改む。

耕柱篇 子墨子曰、鬼神之明智於聖人〔也〕、猶聰耳明目之與聾瞽也。

原

孝治

○下文に據つて「聖人」の下に「也」字を補ふ。下文に云ふ、「鬼神之明智於聖人也、猶聰耳明白之與聾瞽也」と。此處と同じ。

耕柱篇 昔者夏后開、使蜚廉折金於山川、而陶鑄之於昆吾。

○「陶鑄」：于省吾云、「王念孫謂本作鑄鼎於昆吾。金可言鑄、不可言陶。按王說殊誤。陶謂作範。鑄謂鎔金。凡古代彝器、未有不用範者。近世所發現之商周陶範、固所習見。禮記禮運、范金合土疏、范金者謂爲形范以鑄金器。是范金亦陶鑄之義。王謂後漢書注、文選注、藝文類聚、初學記、並作鑄鼎、是不明陶鑄之義而改之也。王又謂路史作陶、玉海作陶鑄之、尤可爲本不作鑄鼎之證、莊子逍遙遊、猶將陶鑄堯舜者也。是陶鑄乃古人諺語」と。

耕柱篇 治徒娛・縣子碩問於子墨子曰、爲義孰爲大務。

○「治徒娛」：于省吾云、「金文治作嗣、嗣司字通。治徒卽司徒。金文作嗣土、官名。此司徒乃複姓、娛其名也」と。

耕柱篇 巫馬子曰、我是彼奉水者之意、而非夫摻火者之意。

○「夫」：馬宗霍云、「夫爲指事之辭、義猶彼也。言我以彼奉水者之意爲是、而以彼摻火者之爲非也。此因上句言彼、故下句變文言夫耳」と。

耕柱篇 一三子復於子墨子曰、耕柱子處楚無益矣。

○「復」：馬宗霍云、「復讀如孟子梁惠王篇上有復於王者之復。趙岐孟子注曰、復白也。是其義」と。

耕柱篇 問所以爲之若之何也、不以人之所不智告、〔以〕人〔以〕所智告之。

○「以」…于鬯云、「以字當在人字之上、以人所智告之、卽上文所謂葉公子高豈不知善爲政者」云云。葉公卽知之。而孔子以其所知告之。故曰以人所智告之、與上句不以人之所不智告、義正相明。智卽知也。以字倒在人所下、則不可通。畢沅本據一本作人以所智告之。孫詒讓閒詰遂斷人字屬上句。亦非也」と。

耕柱篇 今大國之攻小國也、^(甲)攻者農夫不得耕、婦人不得織、以守爲事。攻人者亦農夫不得耕、婦人不得織、以攻爲事。

○(甲)「攻者農夫(以守爲事)」と(乙)「攻人者(以攻爲事)」とは相對す。(乙)の「以攻爲事」は「攻人者」の事、(甲)の「以守爲事」は「守者」の事。故に竇曆本に従ひ、(甲)の「攻者」を「守者」に改む。

耕柱篇 子墨子曰、言足以復行者常之、不足以舉行者勿常、不足以舉行而常之、是蕩口也。

○「常」…于鬯云、「貴義篇、亦有此四句、文字略異。三常字均應讀作崇尙之尙。金文常字通作尙」と。尙、貴義篇、
言足以遷行者常之云云の項參照。

耕柱篇 衛君致祿甚厚、設之於卿。

○「卿」…于鬯云、卿、鄉金文同字と。

耕柱篇 石三朝必盡言。而言無行。是以去之也。衛君無乃以石爲狂乎。

○「無乃」：打消十乃^リ反語。「衛君乃千石ヲ以テ狂ト爲スコト無カラシ乎」

耕柱篇 古者周公旦^(北)非關叔、辭三公、東處於商蓋。

○「非」：陶鴻慶云、非字無義。疑爲北字之誤。北與背同。謂周公因管叔流言、背周而去也。孫卿解敝篇、背而走、楊注背棄去也。漢書高帝紀、項羽追北、韋昭注、北古背字、背去而走也」と。

耕柱篇 昔者夫子有言、曰天下無道、仁士不處厚焉。今衛君無道、而貪其祿爵、則是我爲苟⁽²⁾陷人長也。

①「厚」：墨子考云、厚謂致祿甚厚と。

②「苟陷人長」：馬宗霍云、孫氏謂陷當作咱、是也。余疑長爲糧之省借、未必食字之譌；爾雅釋言云、粧糧也。詩大雅崧高篇鄭箋、禮記王制鄭注竝云、粧糧也。然則苟陷人長猶言苟咱人糧也と。

耕柱篇 公孟子曰、先人有則、三而已矣。子墨子曰、孰⁽¹⁾先人^(而)⁽¹⁾有則、三而已矣。子未智人之先有後生。
○公孟子と墨子の問答である。公孟子の言を墨子が繰返してゐるのであるから、(1)の「而」を削り、(2)の「曰」を「先人」の上に移す。その意味について蘇時學は「此節文有錯誤」とし、小柳氏（漢文大系）も錯誤有りて不明とする。この他、曹耀湘、李笠、張純一等が解釋を試みてはゐるが、明確では無い。句讀についても、「先有」で切るものと下屬するものとがあるが、それは錯誤が有るからの結果である。

耕柱篇 公孟子曰、君子不作、^(述)術而已。子墨子曰、不然。人之其不君子者、古之善者不⁽³⁾誠、今也善者不作。其次不君子

者、古之善者不遂、(述)己有善則作之。欲善之自己出也。

①「術」：秋山云、「術・誅・遂三字、疑述」。吉田云、「術・誅・遂當作述。皆聲誤」と。

②馬宗霍は蘇時學が「其當爲甚字之誤」とするのを「未必是」として云ふ、「此其字蓋與綦通。荀子王霸篇、目欲綦色、耳欲綦聲、楊倞注云、綦極也。綦或爲其、傳寫誤耳、其實非傳寫之誤、綦從其聲、故通作其。說文解字敍庶業其辭、段玉裁注曰、其同荀卿書之綦、猶極也。是其證。然則其不君子者、猶言極不君子也と。」

③「善者」：于鬯云、此兩言善者、下文二言善者。者字實語釋、無義之字、非指人也。……諸文各去者字讀之、其義自明。……夫古之善、原謂古人所已行之善、今之善、謂古人所未行之善。然使以古之善者、今之善者、爲古之善人、今之善人、胥不可解矣と。

④ 試・遂は間詰、誅に作る。

耕柱篇 故（有我）有殺彼以利我、無殺我以利彼〔也〕。

○蘇時學云、二句當有脫訛。以下文語意放之、當言有殺彼以利我、無殺我以利彼也。有我二字疑衍と。秋山云、有我疑衍と。二氏の説に從ふ。

耕柱篇 見人之生餅、則還然竊之、曰、舍余食。不知日月安不足乎。其有竊疾乎。(用)

①「生」：公羊桓八、遂者何生事也、〔注〕正猶造也と。

②「還然」：于鬯云、還有便捷之義。詩還篇毛傳云、還便捷之貌、是也。此乃形容竊者便捷之貌。故曰還然竊之と。

③「月」：于鬯云、月疑用字之誤。詩天保篇云、日用飲食。恐此正本詩語爲說。故曰不知日用不足乎。猶言不知飲食不

足乎。安、語辭也と。

耕柱篇

天下莫不欲與其所好、度其所惡。

興

廢

○ 王引之の校に従ひ、「與其所好、度其所惡」を「興其所好、廢其所惡」に改む。「興其所好」と「廢其所惡」とは相

對す。

（耕柱篇 終）

墨子貴義篇補正

原孝治

貴義篇

貴義篇 今謂人曰予子冠履、而斷子之手足、子爲之乎。必不爲。何故。則冠履不若手足之貴也。

○「何故則」：王念孫が「何故則本作何則：何則與何也同義」とするのを孫詒讓は「按故字似非衍文……王校未竊」とする。馬宗霍は孫説を是として、「本文『則』承『何故』之下、義猶『則以』也。言則以冠履不若手足之貴也。下文『則天下不若身之貴也』、『則食者眾而耕者寡也』、兩『則』字義竝與『則以』同」とする。

貴義篇 子墨子自魯之齊、卽過故人。「故人」謂子墨子曰、今天下莫爲義。子獨自苦而爲義。

○「謂」の上、于省吾の校により「故人」二字を補ぶ。于省吾云、「故人」二字、應有重文。是本作子墨子自魯之齊、卽過故人。故人謂子墨子曰。御覽引亦重故人二字。可證」と。

貴義篇 今天下莫爲義、則子如。勸我者也。

○「如」：王念孫云、「如猶宜也。言子宜勸我爲義也。如字、古或訓爲宜」と。

貴義篇 子之言則成善矣。而君王天下之大王也。^(人)母乃曰賤人之所爲而不用乎。

①「大王」：陶鴻慶云、天下之大王。殊不成詞。大王當作大人。下文云、今農夫入其稅於大人。大人爲酒醴粢盛、以祭上帝鬼神。豈曰賤人之所爲而不享哉。亦以大人賤人對言、是其證也と。

②「母乃曰賤人之所爲而不用乎」を下文には「豈曰賤人之所爲而不享哉」と「母乃」を「豈」に作る。「母」は發聲助也（經傳釋詞卷十）。乃猶寧也、一爲豈字之義（古書虛字集釋卷六）。耕柱篇「石三朝必盡言」の項參照。

貴義篇 一草之本。

○「本」：戶埼云、本根也。薤本・蘭本類。

貴義篇 故〔翟〕雖賤人也、上比之農、下比之藥、曾不若一草之本乎。

○于鬯云、雖上蓋脫一翟字。墨子自稱名也。故翟雖賤人也句義顯。無翟字則不顯。下文云、翟上無君上之事、下無耕農之苦。又云、翟聞之、同歸之物、信有誤者。他篇著翟字者猶不一而足。皆墨子自稱名之證也。

貴義篇 言足以遷行者常之、不足以遷行者勿常。不足以遷行而常之、是蕩口也。

①「常」：尚也。耕柱篇には略同文有り。于省吾云、「貴義篇亦有此四句、文字略異、二常字均應讀作崇尚之尚。金文常字通作尙」と。

②「蕩口」：馬宗霍云、蕩者空泛之稱。論語陽貨篇、其敝也蕩、何晏集解引孔注曰、「蕩無所適守」又「今之狂也蕩」孔注曰、「蕩無所據」墨子本文之蕩口、猶謂無所據守而出謂口也。無所據守之言而常言之、故不足以遷行」と。

貴義篇 必去六辟。必去喜、去怒、〔去哀〕、去樂、去悲、去愛^②、而用仁義、手足口鼻耳〔目〕、從事於義、必爲聖人。

①「六辟」：戶埼云、言下文喜怒樂悲愛也。疑樂上脫哀字。於是六數全也と。

②「去愛」の「愛」は「愛利」の「愛」ではなく、「惜」の意。「愛猶惜也」（禮記表記注）。

貴義篇 今夫子載書甚多、何有也。

「何有也」：于鬯云、「何有也、卽猶言何以也、以有聲韻」。有猶以也、〔有〕古讀若「以」・說見唐韻正故「有」可訓「以」（古書虛字集釋卷一二）。以猶故也（同書卷一）。

貴義篇 故周公旦佐相天子、其脩至於今。

○「脩」：馬宗霍云、經傳修脩二字多通用。修有美善之意、與休義近、休與修古音同在幽部。爾雅釋詁云、休美也。本文修字、亦當讀曰休、而訓爲美。其修至於今、猶言其美至於今也と。

貴義篇 吾取飾車食馬之費與繡衣之財以畜士、必千人有餘。若有患難、則使〔士〕數百人處於前、數百〔人處〕於後、與婦人數百人處於後孰安。吾以爲不若畜士之安也。
（若）

○ 上文に「畜士」と云ひ、下文に「婦人數百人」とあれば「數百人」の上に「士」字を補ふ。

(貴義篇
終)

墨子公孟篇補正

原孝治

公孟篇

公孟篇 子墨子曰、是言有二物焉。子乃①今知其一耳也。又未知其所謂也。若大人行淫暴於國家、進而諫、則謂之不遜、

①「乃」：呂氏春秋義賞篇曰、天下勝者眾矣、而霸者乃五、高注、乃猶裁也。義竝同。漢書功臣表、裁什二三、師古曰、裁與纔同。詞詮云、乃、僅也（卷二）と。

②「大人」：諸葛鍾云、大人謂人主也と。

公孟篇 以廣辟土地、著稅僞材、出必見辱。

○「著稅」：諸葛鍾云、著稅言聚斂稅租。

公孟篇 且子〔墨子〕曰、君子共己〔以〕待。問焉則言、不問焉則止。

①「且」云、「（且子曰）疑當作且子墨子曰」と。「墨子」二字を補ふ。

②「共己」の下に、上文に據って「以」字を補ふ。上文に云ふ、「君子共己以待、問焉則言、不問焉則止」と。此處と同文。

公孟篇 譬若良玉、處而不出、有餘精。(巫) 譬若美女、處而不出、人爭求之。行而自衒、人莫之取也。

○「精」：孫詒讓(精)云、精，審誤精。王校下文諸精字皆爲精。惟此未正。今審校當與彼同。淮南子說山君云、巫之用精，高注云、「精祀神之米」と。

公孟篇 君子服然後行乎。其行然後服乎。

○「其」：其猶抑也（古書虛字集釋卷五）。馬宗霍(云)、其行之其猶抑也と。

公孟篇 周公旦爲天下之聖人。關叔爲天下之暴人。此同服、「而」或「仁」或「不仁」〔也〕。

○上文に據って、「服」の下に「而」字、「不仁」の下に「也」字を補ふ。上文に云ふ、「此同言、而或「仁」或「不仁」也」と。此處と相對す。

公孟篇 夫知者必尊天事鬼、愛人節用。合焉爲知矣。

○「焉」：焉猶則也（經傳釋詞卷一）。

公孟篇 古者聖王、(甲)皆以鬼神爲神明、而爲禍福、執有祥不祥。是以政治而國安也。自桀紂以下、(乙)皆以鬼神爲不神明、不

能爲禍福、執無祥不祥。是以政亂而國危也。

○(甲)「皆以鬼神爲神明」—執有祥不祥」と

(乙)「皆以鬼神爲不神明」—執無祥不祥」とは相對すれば、「而」は「能」に同じ、古書多以而爲能（古書虛字集釋卷六）。

公孟篇喪禮君與父母・妻・後子死、三年喪服。伯父・叔父・兄弟期、〔戚〕族人五月、姑姊妹・舅甥皆有數月之喪。

○比の喪服の期間と儀禮との間に違いが有るのは墨子に見えるものが古く、整理を終へたものが儀禮に記されたものであらう。今儀禮によつて記すと、儀禮では、君・父・後子には斬衰三年、母には父卒した後であれば齊衰三年、父が存命中ならば齊衰期。妻の爲には齊衰杖期、伯父・叔父・兄弟の爲には齊衰不杖期、〔戚〕族人には小功五月である。尙、非儒下篇の「喪、父母三年」の記事もことと同じく儀禮整理以前のものであらう。

公孟篇公孟子曰、國亂則治治之、國治則爲禮樂。
(聽治)

○「治之」は陶鴻慶の校に據り、「聽治」に改む。陶云、「國亂則治之。治則爲禮樂、當作國亂則聽治、國治則爲禮樂。他篇皆以聽治與從事對文。本篇下文、亦云、爲上者行之、必不聽治矣。爲下者行之、必不從事矣。卽其證也。又案、下文〔子〕墨子曰、國之治、國之廢、則國之治又廢。當作國之治、聽治故治也。聽治廢、則國之治亦廢。與下文國之富、從事故富也。從事廢、則國之富亦廢、文法一律。非樂篇云、與君子聽之、則廢君子〔之〕聽治、與賤人聽之、則廢賤人之從事。亦其證也」と。

公孟篇 公孟子謂子墨子曰、知有賢於人、則可謂知乎。子墨子曰、愚之知○^①有以賢於人、而愚豈可謂知○^②矣哉。

①「知」：于鬯云、下知字當讀爲智。下文知矣哉之同。

②「有以」：馬宗霍云、有以孫詒讓引吳寬鈔本作亦有。餘謂有以之以、猶所也。言愚者之智有所賢於人也。卽愚者千慮必有一得之意。裴學海云、以猶所也（古書虛字集釋卷一）。

公孟篇 又以命爲有、貧富壽夭、治亂安危○^①有極矣、不可損益也。

○「有極」：馬宗霍云、孫詒讓云、有極猶言有常。今按、漢書兒寬傳、唯天子建中和之極、顏師固注云、極正也。周禮天官宰夫、歲終則令羣吏正歲會、鄭玄注云、正猶定也。極訓正、正訓定、則極亦有定義。本文有極、猶言有定也。此謂儒者信命、故以貧富壽夭、治亂安危爲有定。唯其有定、故又曰不可損益也。

公孟篇 子墨子曰、^(甲)儒固無此若四政者而我言之、則是毀也。今儒^(乙)有此^(丙)四政者而我言之、則非毀也。告聞也。

①「此若」：若猶此也（經傳釋詞卷七）。故に「此若」は連文。「此若」は墨子書中には尚賢上・節葬下・公孟・魯問(三)の各篇に見ゆ。

② 寶曆本及び(甲)に據り(乙)の「儒」の下に「固」字を補ふ。

③ (甲)の「儒固無此若四政者而我言之、則是毀也」と(乙)の「儒〔固〕有此四政者而我言之、則非毀也」とは相對すれば、(乙)の「此」の下に「若」字を補ふ。

公孟篇 若先生之言、則是不譽禹〔湯〕、不毀桀紂也。

○ 曹耀湘の校に據り、「禹」の下に「湯」字を補ふ。又陶鴻慶云、禹下當有湯字。他篇皆以禹湯與桀紂對文。本篇下文亦屢言禹湯、可證。

公孟篇 先生以鬼神爲明知能爲禍福、爲善者富之、爲暴者禍之。今吾事先生久矣。而福不至。意者先生之言、有不善乎。
鬼神不明〔知〕乎。

① 王念孫云、「富與福同」と。此の「富」は上文の「禍福」の「福」を承くと。

② 「明」の下、下文に據って「知」字を補ふ。下文に云ふ、「意者先生之言、有不善乎、鬼神不明知乎」と。此處と同じ。

公孟篇 子墨子曰、雖子不得福、吾言何遽不善、而鬼神何遽不明。子亦聞乎匿徒〔之〕刑之有刑乎。

① 「何遽」：裴學海云、何遽是複語。遽亦何也（古書虛字集釋卷五）。

② 「匿徒」：孫詒讓云、「此疑當作匿刑徒之有刑乎。衍一之字。刑徒又誤到耳」と。今、閒詰に從ふ。

公孟篇 先生以鬼神爲明〔知〕能爲禍福、爲善者賞之、爲不善者罰之。

① 「明」字の下、上文に據って「知」字を補ふ。上文に云ふ、「先生以鬼神爲明知能爲禍福」と。此文と同じ。

② 此處は禍福に對して、「爲善者賞之、爲不善者罰之」に作るが、上文では禍福に對して「先生以鬼神爲明知能爲禍福、爲善者富之、爲暴者禍之」と「爲善者富之。爲暴者禍之」に作る。上文と併せ考へると、富は鬼神の賞であり、禍は罰である。

公孟篇 子墨子曰、雖使我有病、「吾言何遽不善而鬼神」何遽不明。人之所得於病者多方。

○「子墨子曰、雖使我有病云々」は上文の「子墨子曰、雖子不得福、吾言何遽不善、而鬼神何遽不明」と相對する。故に、吳汝綸の説に従ひ「有病」の下に「吾言何遽不善而鬼神」の九字を補ふ。

公孟篇 有游於子墨子之門者。身體強良、思慮徇通。欲使隨[○]而〔不〕學。子墨子曰、姑學乎。吾將仕子。

○于鬯云、欲使者、其意將然之謂也。隨當讀爲惰。……學上蓋脫不字。謂此人將惰而不學。故下文子墨子曰、姑學乎。必其惰而不學。故語之姑學。又云、吾將仕子。勤於善言而學。善言者、卽吾將仕子之言也。……夫至勤於善言而學、則其惰而不學更可見矣。且下文又云、子不學則人將笑子。故勤子於學、明出不學字。與此不學正相照。此文之脫不字、益明矣。昧於不字之脫、則焉知隨字之讀。云欲使隨而學。一若欲隨子墨子學者、下文皆不可通矣。上文云、有游於子墨子之門者。則固從子墨子學者也。故曰欲使。謂其將然云。或疑使字爲衍。

公孟篇 元四弟曰、子與我葬。當爲子沽酒。

○「與」：王念孫云、與猶爲也。此爲字讀去聲（經傳釋詞卷一）。

公孟篇 夫義天下之大器也。何以〔必〕視人（必）強爲之。

○「必」字は本「視人」の下にあり。今、孫詒讓の校に従ひ「何以」の下に移す。孫詒讓云、「今以語氣校之、竊疑必字當在視人上。仍爲詰責之辭、與上文不視人云々、文例正相對也」と。

公孟篇 一二三子復於子墨子曰、告子曰、〔墨子〕言義而行甚惡、請棄之。

○孫詒讓の校に據り、「言義」の上に「墨子」の二字を補ふ。孫詒讓云、「此文當作告子曰、墨子言義而行甚惡」と。

公孟篇 子姑子之身亂之矣。

○「止」：馬宗霍云、此承上文「子口言之、而身不行」爲言、則姑止之止、猶止也。謂子姑止而勿言也。列子仲尼篇、止變亂於心慮、殷敬順釋文云、止一本作止。是止與止通之證。

(公孟篇 終)